琉球大学学術リポジトリ

大学生のカンニングに対する態度

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2011-04-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 名城, 嗣明, Nashiro, Shimei
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19314

大学生のカンニングに対する態度

名　城　嗣　明

Ⅰ 問　　題

大学生のカンニングに対する態度及び行動について，ヘンリックス注1)は米国のある大学で調査した結果，カンニングは大学生間でかなり流行していること，及びカンニングを大学生たちが一般にそれほど強く罪悪視していないことをつきとめた．ヘンリックスはその調査にもとづく考察として，過去の道徳律の機能喪失，現在の教育制度では知識の獲得が第二義的なものになつていること，現在の試験制度は学生対教授の一種のゲームの様相を呈していること，旧来の道徳律に代るべきものがないこと等を挙げている．

ヘンリックスの調査結果を参考にして同様な調査を行い，沖縄の大学生のカンニングに対する態度及び行動の特徴について調べて見たいと考えた．

Ⅱ 方　　法

1 調 査 対 象

一年次から四年次までの男女大学生 274 人注2)を対象とした．その男女別，学年別の構成は第一表の通りである．

第一表　調査対象の男女別，学年別の構成注3)

	一年次	二年次	三年次	四年次	計
男	23	35(20)*	34	26	118
女	15	(53)*	66	19	153
計	38	88	100	45	総計 271

*（　）内は新三年次（注２参照）

2 質問紙及び実施

ヘンリックスが調査した諸項目とヘンリック注4)の諸仮説を参照して次の15項目から成る質問紙を作成した．（各項目の意味は Appendix を参照されたし．）

① 推定パーセント
② 目　　撃
③ 不正直の傾向
④ 会 計 選 出
⑤ a盗み，b傾向，素質
⑥ 出勤簿，税金
⑦ 成 績 低 下
⑧ 憎　悪　感
⑨ 報　　告
⑩ オーナーシステム
⑪ 処　　分
⑫ 経　　験
⑬ しない理由
⑭ する理由
⑮ 条　　件

この質問紙を筆者及び同僚の担当する講義の学生に教室において実施した．記入は無記名とし，単に学年と男女の別を明示するよう依頼すると共に正直な回答を記入するよう要請した．

注１） Henricks, M.L.: Cheating mores Concerning Cheating on Examination: School and Society, November 22, 1958, Vol. 86, #2141

注２） 二年次のサンプルは男子15名が得られたが女子は全く得られなかつたので，二年次の課程を終了した直後の新三年次の学生を調査して二年次に含めた．他はすべてその学年の後期の期末試験を直前にひかえた学生たちである．

注３） 学年の明らかでない女子の回答三枚は第一表には含まれていないが，男女別の調査等には含まれた．

注４） Cheating: Ka Leo O Hawaii, Vol. XXXIV, #14, University of Hawaii, Jan. 12, 1961

Ⅲ　結果注5) 及び考察注6)

結果は男女別，上級対下級，及び行為の有無別に示した．（第二表から第六表まで）なおヘンリックスの調査との比較も示した．（第七表）

1）男子全体と女子全体の比較（第二表）

男子と女子の「推定%」はそれぞれ22%と24%で，自分の属する集団についての一般的判断に差のないことが分る．なお男子と女子のそれぞれの推定%のひろがりは男子1%～90%，女子1%～80%である．

「目撃」の%は差を示し，カンニング（以後不正と呼ぶ）の目撃は男子に多い．このことと「経験の有無」及び「条件」中の「対人」を関連させて考えられることは，男子の経験者（50%）は女子（24%）よりも多く，又男子は不正の生じ易いクラスの対人関係の条件として圧倒的に（83%）友達どおしのふんい気を挙げているのに対し，女子は52%が同条件を挙げていることは，女子においては赤の他人どおしのふんい気での閉鎖的単独行為が多い事を暗示し，以上のことから，より開放的，集団的で，しかも経験者のパーセンテージの高い男子に目撃者が

第二表　男子全体と女子全体の比較

項目	問題番号	1	2††		3			4 ††			5						6		
	項目	推定%	目撃		不正直の傾向			会計選出			a．盗み			b．傾向，素質			出勤簿，税金		
	回答*		Y	N	Y	N	U	Y	N	U	Y	N	U	Y	N	U	Y	N	U
男	N＝118	22%**	68%	32%	17%	60%	23%	46%	33%	21%	5%	74%	21%	16%	52%	32%	18%	53%	29%
女	N＝156	24%**	36%	64%	21%	48%	31%	28%	38%	34%	1%	72%	27%	18%	38%	44%	23%	48%	29%

* 回答欄のY，N，Uはそれぞれ「はい」，「いゝえ」，「わからない」を意味する
** 回答者による推定%の平均　†1%で有意　††5%で有意

7			8			9			10			11				12††		13			
成績低下			憎悪感			報告			オーナーシステム			処分***				経験		しない理由			
Y	N	U	Y	N	U	Y	N	U	Y	N	U	退	停	説	F	Y	N	a	b	c	d
36%	55%	9%	29%	57%	14%	14%	72%	14%	28%	40%	32%	1%	2%	53%	43%	50%	50%	53%	7%	5%	35%
35%	53%	12%	38%	49%	13%	17%	57%	26%	32%	33%	35%	1%	1%	61%	37%	24%	76%	66%	3%	2%	29%

***「その他」に属する1%をのぞいた．

14				15 条件							
する理由				対人††		人員		テスト		科目††	
a	b	c	d	顔見知り	他人	大	小	中間	期末	専攻	その他
11%	2%	83%	4%	83%	17%	98%	2%	27%	73%	12%	88%
14%	3%	69%	14%	52%	48%	96%	4%	22%	78%	27%	73%

注5）結果の分析は，推定%を中央値テスト，その他はすべてカイ二乗テストによつた．
注6）事情により大学生を公平に代表するランダムサンプルが得られなかったので，こゝでの考察及び結論もその制約を受ける．

多いのではなかろうか．

経験者に対する社会的，道徳的信頼については，女子の方がより拒絶的傾向を示し，不信感が強いように見受けられる．男子は経験者を金銭的に信頼する者（会計選出）が47%，信頼しない者が33%であるのに対し，女子は信頼する者28%，しない者52%を示している．

男女とも，カンニングと盗みを切りはなして考える傾向は強いが，経験者に盗みの傾向，素質があると思うかという問いに対しては男子はより防衛的であり，女子はより懐疑的である．

しかし「会計選出」や「盗み」に関する男女差は，男子と女子の本質的態度の差から来るものではなく，むしろ経験者と無経験者の態度の差から来ると考えられる．このことは第五表と第六表において，経験者と無経験者の態度の差が男女にかゝわらず共通の傾向を示していることと，男子には経験者が多いので，全体として経験者に属する態度が強く反映され，経験者の少ない女子のグループは全体的に見た場合，無経験者に属する態度が強く打ち出されることになり，第二表に見られるような男女の表面的な差となつて現れるものと思われる．

この事は第二表の他のほとんどの項目についても当てはまる．従つてカンニングについての男女の態度の差は経験者どおし，及び無経験者どおしの比較によらねばいけない．

2）男子上級生対下級生の比較（第三表）

下級生のサンプルが少ないことが先ず挙げられる．次に，理想的には同一のサンプルについ

第三表　（男子）上級（三，四年次）対下級（一，二年次）の比較

項目	問題番号	1	2 ††		3			4 †			5						6		
	項目	推定%	目撃		不正直の傾向			会計選出			a．盗み			b．傾向，素質			出勤簿，税金		
	回答*		Y	N	Y	N	U	Y	N	U	Y	N	U	Y	N	U	Y	N	U
上級	N＝60	22%**	80%	20%	18%	62%	20%	57%	28%	15%	7%	74%	19%	14%	61%	25%	21%	48%	31%
下級	N＝38***	10%**	39%	61%	16%	58%	26%	26%	53%	21%	3%	71%	26%	21%	42%	37%	21%	50%	29%

* Y＝はい，N＝いゝえ，U＝わからない　†1%で有意　††5%で有意

** 回答者による推定%の平均

*** 新三年次を含まない

7			8			9			10			11				12††		13			
成績低下			憎悪感			報告			オーナーシステム			処分				経験		しない理由			
Y	N	U	Y	N	U	Y	N	U	Y	N	U	退	停	説	F	Y	N	a	b	c	d
40%	52%	8%	27%	62%	11%	13%	74%	13%	32%	35%	33%	0	2%	56%	42%	57%	43%	53%	10%	3%	34%
22%	67%	11%	31%	53%	16%	18%	66%	16%	29%	45%	26%	3%	0	50%	47%	28%	72%	53%	3%	3%	41%

14				15 条件							
する理由				対人†		人員		テスト†		科目	
a	b	c	d	顔見知り	他人	大	小	中間	期末	専攻	その他
11%	2%	84%	3%	74%	26%	98%	2%	19%	81%	18%	82%
17%	0	77%	6%	92%	8%	100%	0	42%	58%	11%	89%

て継続的な調査をすべきであり，あるいは少なくとも学部，専攻学科等について統制されたサンプルについて行なうべきだろうが，この調査のサンプルでは必ずしもこの条件にかなうとは云えない．

第五表と第六表から明らかのように，推定%の低いことは「無経験者」の一般的特徴であるが，第三表でも無経験者の多い下級生の推定%は統計的に有意ではないがこの一般的傾向を示している．又目撃者が下級生では少ないのも当然である．

「会計選出」において下級生が示す経験者に対する不信感の強さも，無経験者特有の態度の反映と思われる．

「条件」中の「テスト」について，下級生で中間テストを挙げた%がいちゞるしく高いのは例外的である．他のすべての資料は一致して期末テストの%がはるかに高い．

3）女子上級生対下級生の比較（第四表）

男子の場合に比し，推定%に上級，下級間の差がほとんどないのは，二年次の女子学生のサンプルが得られず，その為，四月に新しく三年次に進級した女子学生を，新学期開講後一週間を経て調査し，これを二年次後期と見なした事にも原因があると思われる．

しかし，後期の期末試験を目前にひかえた一年次の女子学生の推定%がわずかに7%を示したに過ぎなかつたのに，二年次を了えたばかりの女子学生の推定%が29%にも達したことか

第四表　（女子）上級（三，四年次）対下級（一，二年次）の比較

項目	問題番号	1	2		3			4			5						6		
	項目	推定%	目撃		不正直の傾向			会計選出			a．盗み			b．傾向，素質			出勤簿，税金		
	回答*		Y	N	Y	N	U	Y	N	U	Y	N	U	Y	N	U	Y	N	U
上級	N＝85	24%**	34%	66%	21%	51%	28%	31%	38%	31%	1%	71%	28%	19%	45%	36%	23%	52%	25%
下級	N＝68	25%**	37%	63%	19%	44%	37%	26%	34%	40%	0	69%	31%	17%	29%	54%	23%	39%	38%

* Y＝はい，N＝いゝえ，U＝わからない　†1%で有意　††5%で有意

** 回答者による推定%の平均

7			8			9			10 †			11				12		13			
成績低下			憎悪感			報告			オーナーシステム			処分***				経験		しない理由			
Y	N	U	Y	N	U	Y	N	U	Y	N	U	退	停	説	F	Y	N	a	b	c	d
39%	51%	10%	33%	52%	15%	15%	58%	27%	42%	31%	27%	4%	1%	61%	34%	25%	75%	64%	3%	1%	32%
28%	56%	16%	43%	46%	11%	15%	59%	26%	20%	38%	42%	1.5%	1.5%	59.5%	36%	24%	76%	74%	1%	3%	22%

***「その他」に属する1.5%をのぞく

14				15 条件							
する理由				対人††		人員		テスト		科目	
a	b	c	d	顔見知り	他人	大	小	中間	期末	専攻	その他
13%	5%	70%	12%	40%	60%	96%	4%	18%	82%	26%	74%
17%	0	70%	13%	67%	33%	96%	4%	27%	73%	25%	75%

ら，二年次はカンニングに対する態度に急激な変化を生ずる時期だと云えるかも知れない．

この事は男子の場合にも当てはまる．即ち推定%は，男子において一年次後期にわずか4%で，二年次後期に19%に上昇し，二年次を終了した直後，すなわち三年次の新学期においては40%に達した．

第四表に現れたように，女子においては経験の%に上級，下級間の差がないので，男子の場合よりも純粋に上級，下級間の態度の比較が出来ると思う．この見地に立つて比較すると，最も顕著な事実は「オーナーシステム」について，下級生はかんとくなしの試験が成功すると思うかという問いに対し，より否定的，懐疑的態度を示していることである．

「条件」中の対人関係について，不正の生じ易い条件として下級生は「顔見知り」を大部分の者が挙げているのに反し，上級生は大半が「他人」を挙げている．その意味は明らかでない．例えば，女子においてはカンニングはだんだん閉鎖的，単独的な方向に動きつゝあるのか．

その他に「盗みの傾向，素質」，「出勤簿」，「憎悪感」等において下級生がより強い不信感を持つているようだが，顕著でない．

4）男子についての経験者対無経験者の比較（第五表）

第五表から次の諸点が考察される．

1　経験者は他人もまた同じ不正を犯していると考える傾向が強い．

2　経験者は自分がもともと不正直ではないと考える傾向が強い．即ち，カンニングの行為

第五表　（男子）経験者と無経験者の比較

項目	問題番号	1 ††	2 ††		3 ††			4 ††			5						6		
	項目	推定%	目撃		不正直の傾向			会計選出			a．盗み			b．傾向素質††			出勤簿，税金		
	回答*		Y	N	Y	N	U	Y	N	U	Y	N	U	Y	N	U	Y	N	U
経験者	N＝44	28%**	91%	9%	4%	80%	16%	64%	19%	17%	4%	81%	15%	7%	70%	23%	14%	58%	28%
無経験者	N＝52	12%**	42%	58%	27%	44%	29%	30%	54%	16%	6%	71%	23%	27%	40%	33%	27%	40%	33%

＊ Y＝はい，N＝いゝえ，U＝わからない　†1%で有意　††5%で有意

** 回答者による推定%の平均

7			8			9			10			11				13			
成績低下			憎悪感			報告			オーナーシステム			処分				しない理由			
Y	N	U	Y	N	U	Y	N	U	Y	N	U	退	停	説	F	a	b	c	d
43%	50%	7%	25%	64%	11%	9%	75%	16%	23%	45%	32%	2%	0	65%	33%	44%	11%	7%	38%
24%	64%	12%	33%	52%	15%	21%	64%	15%	35%	33%	32%	0	2%	42%	56%	61%	4%	0	35%

14 †				15 条件							
する理由				対人		人員		テスト		科目	
a	b	c	d	顔見知り	他人	大	小	中間	期末	専攻	その他
2.5%	2.5%	90%	5%	80%	20%	98%	2%	24%	76%	17%	83%
21%	0	71%	8%	83%	17%	100%	0	29%	71%	15%	85%

は例外的であつて，そのことだけから一般的な行動傾向を断定すべきではないという合理化もしくは分離（dissociation）が行なわれている．

3　経験者はカンニングと金銭的信頼は無関係であるとして，二つを切りはなして考える傾向が強い．カンニングに対してはさほど強い道徳的意義を付していない．こゝにも合理化，反動形成もしくは分離のメカニズムが働いている．

4　経験者は60%までが「落第することを恐れて」という理由を挙げ，且つ推定%も高いことから，成績低下の被害感は強いが，不正行為者に対する憎悪感は無経験者よりも低く，又「報告」への協力の意志と，オーナーシステムの成功の確信度は無経験者よりも低いという諸傾向が見られるが，「理由」と「推定%」以外は有意でない．

5　不正行為に対する処分要求においても無経験者の方がきびしいという傾向が見られるが有意でない．

以上の諸点については，ディソナンス理論注7）の立場からの考察もまた可能である．

5）女子についての経験者対無経験者の比較（第六表）

ほとんどの項目について男子の場合に見られる傾向と一致している．たゞ，女子の場合は，

第六表　（女子）経験者と無経験者の比較[注8]

項目	問題番号	1 ††	2 ††		3			4 †			5						6		
	項目	推定%	目撃		不正直の傾向			会計選出			a．盗み			b．傾向，素質			出勤簿，税金		
	回答*		Y	N	Y	N	U	Y	N	U	Y	N	U	Y	N	U	Y	N	U
経験者	N＝22	42%**	59%	41%	14%	55%	31%	45%	23%	32%	0	82%	18%	15%	55%	30%	9%	68%	23%
無経験者	N＝81	15%**	22%	78%	26%	48%	26%	22%	50%	28%	1%	68%	31%	22%	34%	44%	28%	49%	23%

* Y＝はい，N＝いゝえ，U＝わからない　†1%で有意　††5%で有意

** 回答者による推定%の平均

7			8			9			10			11 ††				13			
成績低下			憎悪感			報告			オーナーシステム			処分				しない理由			
Y	N	U	Y	N	U	Y	N	U	Y	N	U	退	停	説	F	a	b	c	d
36%	50%	14%	23%	59%	18%	9%	64%	27%	36%	23%	41%	0	0	84%	16%	59%	9%	0	32%
35%	55%	10%	36%	51%	13%	24%	54%	22%	43%	27%	30%	1%	1%	50%	48%	64%	1%	1%	34%

14				15 条件							
する理由				対人		人員		テスト		科目	
a	b	c	d	顔見知り	他人	大	小	中間	期末	専攻	その他
0	5%	82%	13%	40%	60%	95%	5%	25%	75%	24%	76%
19%	5%	64%	12%	42%	58%	97%	3%	15%	85%	30%	70%

注7）ディソナンス理論について，フェスティンガー，シャズ等の考え方について紹介したものに，東江平之「迷信とデマの心理」：沖縄公論，1962年7月号 pp. 28～32がある．

注8）新三年次のサンプルは含まれないが，学年不明の3枚は含めた．

成績低下の被害感と行為者に対する憎悪感において，経験者と無経験者の間に男子ほどの差がないことや，オーナーシステムに対する確信度でも男子ほどの差を示さないことなどが見られるが，いずれも明らかではない．

6）米国と沖縄の学生の比較（第七表）

ヘンリックスの資料からは米国のサンプルの内容は明らかでないし，又その他の事情から，公正な比較は不可能であるが，第七表から，特に顕著な対比は次の諸点である．

第七表　米国と沖縄の大学生の比較

（表中のY，N，U，はそれぞれ「はい」，「いゝえ」，「わからない」を意味する）

項目	経験 全員		経験 四年次のみ		不正直の傾向 全員			会計選出 全員			盗み 全員			成績低下 全員			憎悪感 全員		
	Y	N	Y	N	Y	N	U	Y	N	U	Y	N	U	Y	N	U	Y	N	U
米国	57%	43%	75%	25%	13%	54%	33%	22%	34%	44%	7%	／	／	73%	7%	20%	20%*	13%	／
沖縄（男）	50%	50%	50%	50%	17%	60%	23%	46%	33%	21%	5%	／	／	36%	55%	9%	29%	57%	／
沖縄（女）	24%	76%	16%	84%	21%	48%	31%	28%	38%	34%	1%	／	／	35%	53%	12%	38%	49%	／

＊ヘンリックスは単に「20%以下」と記している．

報告 全員			処分 全員		
Y	N	U	退	説	F
12%	55%	33%	1%	**	3%
14%	72%	14%	1%	53%	43%
17%	57%	26%	1%	62%	35%

** この欄に該当する数についてヘンリックスは単に大部分の者と記している．ヘンリックスによれば他に「数パーセント」の者が「行為のあつたテストのみにFを与えるべき」と答えている．

1　沖縄の学生，特に女子は行為が少い．

2　行為者に対する不信感は沖縄が強い．

3　成績低下の被害感は米国がはるかに強い．

4　「報告」の拒否は沖縄の男子が強い．

5　不正行為に対する処罰要求のきびしさは沖縄が男女ともに米国をしのぐ．

ヘリックはカンニングについて次の仮説をたてゝいる．

1　しない理由として，「良心がとがめる」，「自尊心がゆるさない」

2　する理由として，「精神的に未熟」，「落第のおそれ」

このうち「精神的未熟」以外は圧倒的多数の回答を得た．

3　行為の生じ易い条件として，「大きなクラス」，「赤の他人どおしのクラス」

このうち後者（赤の他人…）は男子の場合反対の結果が出た．女子の場合は第二表では半々となつているが，第六表ではヘリックの仮説を裏づけている．

しかし，カンニングには集団行為と単独行為があり，又カンニングという行為がその集団で，あるいは個人にとつてどの様な道徳的意味を持つかによつても対人関係の条件は異ると考えられる．集団行為に訴える者にとつては「親しい友人どおし」のふんい気が好都合であろうし，カンニングが恥ずべき行為であると考える者にとつては「旅の恥はかきすて」式の他人どおしの対人関係が好都合と云えるかも知れない．

なお，質問紙の中に「どの学年に最も不正行為が多いと思うか」という問を設けたところ，中校と高校では二，三年，大学では二年次にふえて，その後四年次まであまり変らないという傾向を示しているが，以上の学年のうち，高校三年が目立つてカンニングの多い年であると思われる．（第八表）

第八表　「どの学年に最も不正行為が多いと思うか」という問に対する回

		中校			高校			大学			
		1	2	3	1	2	3	1	2	3	4
男子	一年次	2	3	4	4	8	14	2	2	2	1
	二年次	2	4	3	3	12	17	0	13	6	5
	三年次	4	6	5	0	8	11	3	10	11	10
	四年次	1	5	7	2	10	11	2	2	8	9
女子	一年次	1	1	4	1	2	11	0	1	0	3
	二年次	1	5	13	3	9	20	10	23	22	27
	三年次	12	15	19	8	18	26	6	16	12	17
	四年次	2	2	7	2	4	10	2	6	4	3
	計	26	43	65	24	73	123	26	55	68	79

Ⅳ　結　　論

大学生のカンニングに関する態度及び行動の特徴は本質的に男女差に帰するものはほとんどない．結局，男女にかゝわらず，不正行為を経験した者としなかつた者との差に帰すべき性質のものである．表面的に現れた男女差は，男子，女子それぞれのグループ内における経験者のパーセンテージを反映している．もう一つは，女子においては一般に閉鎖的，単独的不正行為の多い事を暗示しているが，この事から直ちに女子が一般にカンニングを男子より罪悪視していると云えるはつきりした根きよはない．

男女ともに，二年次の後期においてカンニングに対する態度及び行動に急激な変化がおこると考えられる．これは，大学という社会への適応が最も活潑に行なわれる時期と云えるかも知れない．

態度及び行動特徴について最も顕著な差を示すのは，男女ともに不正行為の経験者対無経験者の比較においてである．一般に経験者はカンニングという行為に対して，より防衛的で，合理化，分離（dissociation），反動形成などのメカニズムを用いる傾向が見られる．

米国の資料との比較から，沖縄の学生の方がカンニングという行為を，より罪悪視している

事を暗示している．不正行為者も沖縄の方が少いと思われる．

不正行為の生じ易い条件として，クラスの対人関係が赤の他人どおしであることという仮説もあるが，この調査結果では一概にそうも云えない．この条件は，不正行為の形成，カンニングについての道徳的意義などによつて左右されるのではないかと考えられる．

中校から大学にかけて，最も不正行為の多い学年は高校の三年と思われるが，果して事実か，もしそうなら何故かということについては更に調査が必要である．

Summary

On the basis of data obtained from a questionnaire given to college students of Okinawa, attitudes and behaviors concerning cheating were studied within three major comparisons: boys vs. girls, lower-class (freshmen and sophomores) vs. upper-class (juniors and seniors), and offenders vs. non-offenders.

It was concluded that the observed sex differences are mostly superficial phenomena which merely reflect the differences between offenders and non-offenders, and should not be attributed to the essential difference in sex.

More boys cheat than girls, and the data suggest that girls are more covert and independent in cheating behavior compared with boys who seem to show stronger tendency of resorting to overt and group cooperation.

It is presumable that sophomore is the year when an abrupt change occurs in attitude and behavior concerning cheating.

In general, regardless of sex, offenders are more defensive than non-offenders: mechanisms of rationalization, dissociation and reaction formation seem to be more actively operating on the attitudes and behaviors of offenders.

Direct comparison between American and Okinawan college students is limited. On the basis of data available, however, it is suggested that cheating is more common among American students. Okinawan students seem to feel more guilty about cheating behaviors.

For a hypothesis that there is more cheating in a class where no one knows his neighbor, the result of this study is not necessarily supporting. Whether this condition is considered as convenient by offenders seems to depend on such factors as the type of behaviors and the individual value stsyems.

The data also suggest that from junior high school through college, 12th grade is the year when cheating behavior is most prevailing.

APPENDIX

質問紙の項目の意味を明らかにする為に，それぞれの項目をその該当する問の要約と共に示す。

1 推定パーセント

大学入学以来の経験者の数は全学生の何%に当ると思うかという推定

2 目　　撃

不正行為を目撃したことがあるか

3　不正直の傾向

経験者はもともと不正直の傾向があると思うか

4　会計選出

経験者を会計係に選出するか

5　a 盗　　み

不正行為者は盗みも行う人間と思うか

b 傾向，素質

経験者は盗みの傾向，素質を有すると思うか

6　出勤簿，税金

経験者は出勤簿，税金等もごまかすと思うか

7　成績低下

不正行為者が居るので自分の成績が低下すると思うか

8　憎悪感

不正行為者を憎いと思うか

9　報　　告

かんとくなしの試験で不正行為者を密告するよう教授に頼まれたら協力するか

10　オーナーシステム

かんとくなしの試験（オーナーシステム）は大学で成功すると思うか

11　処　　分[注9)]

不正行為者に対する適切な処分は何か

退—退学　**停**—停学　**説**—説諭　**F**—そのテスト又は最終成績をFにする

12　経　　験

経験の有無

13　しない理由

a　良心がとがめる

b　つかまるのがこわい

c　看視が厳重

d　自尊心（ほこり）

14　する理由

a　精神的に未熟

b　両親の成績に対する圧力

c　落第のおそれ

d　スリルを味わう

15　条　　件

行為の発生し易い条件

対人—クラスの対人関係について，お互いに友達どおし（**顔見知り**）か赤の他人どおし（**他人**）か

人員—クラスの人員数が大きい（**大**）か小さい（**小**）か

テスト—中間試験（**中間**）か学期末試験（**期末**）か

科目—専攻科目（**専攻**）か一般教養及びその他の科目（**その他**）か

注9）質問紙にはこゝに記された4つのカテゴリーだけを提示したがこの4つ以外の処分の種類を自分で記入した者も居る．「全く処罰を与えない」，「再試験をする」等である．